

日本ブランド発信事業
(コミュニケーションロボットによる日本の技術と文化の発信)

2016年3月
「日本ブランド発信事業」専門家
ロボットクリエイター 高橋智隆

【実施主旨】

コミュニケーションロボットは、日本のロボット技術と、漫画・アニメ・ゲームなどのコンテンツ産業とが融合した分野であり、世界的なロボット開発競争の現状においても、日本が技術的・文化的に大きなアドバンテージを持っています。

引き続き日本がコミュニケーションロボット分野を牽引し、本分野の世界展開における現地企業との協業や、日本企業や大学との交流促進に貢献するべく、ロボット3台のデモンストレーションを交えつつ、ロボットの技術、市場、日本文化との関わりについて、クロアチアとスペイン2か国に於いて講演を行いました。その概要は以下の通りです。

【実施日程】

2016年3月6日～3月12日

【実施内容】

クロアチアでは現地到着前から地元新聞に3面にわたり大きく記事が取り上げられ、日本のロボット技術への関心の高さがうかがえた。また英語の習得率が高くクロアチアでのすべての講演・取材は英語で実施した。

■ 3月7日

首都ザグレブの滞在ホテルにてクロアチア国営テレビ「おはよう、クロアチア」インタビュー収録のあと、4時間半の車移動でスプリトへ。メディア各社の囲み取材の後、スプリト大学で講演。

終了後 井出大使主催の夕食会が開かれ、スプリト大学学長・副学長らと交流を深めた。学長は以前から今回の招致を熱望して下さっていたとの事で、講演にも大変満足頂き、今夏スプリトで開催される一大フェスティバルでのパフォーマンスを提案されるなど大変友好的な関係を築けた。



(スプリト大学での講演の様子)

■ 3月8日

4時間の車移動でリエカへ。リエカ大学学長らとの昼食後、リエカ大学にて講演。
講堂を仕切り半分のスペースで実施する予定でしたが、開始よりかなり早い時間から多くの学生が集まり、急きょパーテーションを取り除き全スパンで実施。それでも入りきらないほどの大盛況ぶりだった。
その後、井出大使公邸にお招き頂きザグレブ大学関係者との会食も行われた。



(リエカ大学での講演の様子)



(大使公邸での夕食会)

■ 3月9日

ザグレブ大学 電子工学・コンピューター学部長との意見交換、校内視察、学部生のプレゼンの後に講演。
終了後スペイン・マドリードへ移動。

■ 3月10日

マドリード自治大学にて地元テレビ局の取材後、工学部の学生向けに講演。昼休みの時間帯での実施だったこともあり人の出入りが激しくまた英語の理解度が想定以上に低かったためやや難しい状況ではあったが、多くの学生が訪れ、後方に椅子を追加しても足りず立ち見が出るほどだった。
午後はアルコベンダス科学技術博物館にて講演。マドリード工科大学学生を中心に小さなお子様のいるファミリーなども招待されていたため、急きょ博物館のスタッフが同時通訳を務め英語とスペイン語で実施。
講演の前後には複数のメディアによる取材が続いた。



(アルコベンダスでの講演の様子)

■ 3月11日

午前中は大使館にて通信社2社のインタビュー取材を受け、午後はロボット博物館で講演。招待客のみのクローズドな形でスペイン語の通訳を交えて行われた。

終了後は平田公使主催の夕食会が開かれ、講演を実施したマドリード自治大学・アルコベンダス科学技術博物館・ロボット博物館の関係者と更に交流を深めた。



(ロボット博物館での講演の様子)

■ 3月12日

アルコベンダス科学技術博物館にて幅広い年代の会員の子供たちを招いて講演を実施。スペイン語通訳を交えて行ったが大人に比べ子供たちの英語理解度の高さに驚いた。またロボットへの関心も非常に高く講演後は時間が足りないほど質問が続いた。終了後、帰国の途に就く。

【まとめ】

本発信事業ではメディア取材が非常に多く、ロボット分野への期待の大きさと、日本のロボットへの関心の高さがうかがえた。中でも、ロボットがどのように人々の暮らしの中に浸透していくのか、その際のメリットとデメリット、それをロボット技術・文化先進国である日本はどのように理解・認識しているのか問われる事が多かった。

大学においては、ロボット関連分野について、いかに民間企業との共同研究を促進させ、地域産業発展に寄与していくかという議論が多く為されていた。IT企業主導の米国とは異なり、大学の研究者が国の科学・産業施策に関わりながら、産官学連携に大きな役割を果たしているように感じられた。

このように、大学はロボット産業の勃興に取り組んでいるのに対し、メディアはロボットや人工知能の普及を前提とした数年後を見据えているようである。

両国とも、IT産業やロボット研究における世界的中心ではないが、今後の科学・産業の動向への関心が高く、先駆者としての日本の技術や社会の中でのロボットの捉え方に注目していた。引き続き、日本の文化と技術が融合したロボット分野について、情報発信や技術交流を続け、日本が世界を牽引しながらその役割を果たしていく必要性を強く感じた。

【参考リンク】

[外務省「日本ブランド発信事業」ウェブサイト](#)

[株式会社ロボ・ガレージ ウェブサイト](#)